





若葉の初代尋子て皆をこゝろあつて下々の
 源ともせむく波路を舞にたつあとも早のちる魚
 波之入てはうま思ふまゝのうらみくはら
 何手は大臣の河海の流ふ殿を採る道彼大殿の
 花鳥の障子の情をこゝろはひらるは鶴とあつて紙江の
 流ははたけのま一落のまゝに花並水の如くは理とと
 比おしれとひとをくひあつてこの世より今の世より
 あつて後人へは考へ細谷門の絶やひ望つてはつては延

飛鳥のあはれとてはなほ公林とて海とては
あはれは此物洛陽と男女の情とてはなほ
又偏のるとは一谷は動の西は遊とてはなほ
止親言義の深とてはなほ一とてはなほ
ふつとてはなほ一列は言のふつとてはなほ
とてはなほ一とてはなほ一とてはなほ
の深とてはなほ一とてはなほ一とてはなほ
杯事清夜の出とてはなほ一とてはなほ一とてはなほ

月のはなれとてはなほ一とてはなほ一とてはなほ
とてはなほ一とてはなほ一とてはなほ一とてはなほ
あはれとてはなほ一とてはなほ一とてはなほ一とてはなほ
詞の義とてはなほ一とてはなほ一とてはなほ一とてはなほ
の深とてはなほ一とてはなほ一とてはなほ一とてはなほ
あはれとてはなほ一とてはなほ一とてはなほ一とてはなほ
此文とてはなほ一とてはなほ一とてはなほ一とてはなほ
あはれとてはなほ一とてはなほ一とてはなほ一とてはなほ

大いなる野道にひらく世に於てはこれ
 なむいふ事成りたれども松の山人
 こゝろをさす下をさす世に於ては
 心も成りしる成りしるけりて返りて

只の休山草

源語忍草卷之一

目録

- | | |
|-----|-----|
| 桐壺 | 笈木 |
| 空蟬 | 夕顔 |
| 若紫 | 未摘花 |
| 紅葉賀 | 花の宴 |
| 葵 | 柳 |
| 花散里 | 須磨 |
| 明石 | |

きくづひなく清冠をなすあはびとさふうつて弘徽殿
の女清こよひをなすあは何うこの女清こよひをなすあはびとさふうつて弘徽殿
ら縁ゆかりくしと事ことも教しふべ此弘徽殿とらふの右大臣の
西にしひとあおのふふりさ記しままりあひて持もつたゆとに
つつの朱雀出い来きとせあ人が雄鷹なるとも此弘徽殿とらふ
と人ひと様さませあ人がゆして更衣えんぎのかううのれとて
思おもひてそのぼの痛いたまありのあつとみとていとも衣えふ
思おもひとゆとにきゆのおの皇子とみと生なれあつと書かし源氏
あり此君このきみ三さんのよ女めあつと女め母はは更衣えんぎの日ひの痛いたまありの
その限かぎあつとゆとみとあつとゆとよとていとも人ひとおん
給たまふみりと名な稱なづねとせ給たまひとゆとゆとゆとゆと
ねとまをせけとて更衣えんぎ

かざりもそ別わかるるの出いでいゆゆりいの命いのち給たまひと
とらふみあま輦車の宣せん旨しめと下くださる此車このくるまのまをせひく
衣えの肉にくをけり也なり馳ちをりねがさるものたつとて
ゆふとせあま守まもり源氏げんじをむ肉にく裏うらに玉をりて更衣えんぎをつと
出いでいゆとと清きよ俊とのゆと夜よ半はん道みちをゆとゆとゆと
なると給たまふと清きよ俊とのゆと来きと奏そうす聞百ひゃく寸すん清きよ俊との
何事なにことも思おもひと寸すん清きよ俊とのゆと来きと奏そうす聞百ひゃく寸すん清きよ俊との
おまをせと人ひと出いで給たまひと更衣えんぎの母はは君きみをあかく給たまふ賜たまひ

とせあり。唯人としておなじけの事後見せとせたまふとく
天下をのぞり給ふんと奏しけしむと申すふきんとおぼし
相人源氏の事ありをきて。光る君と号しけり。年月
ゆきと更衣の事わかれせ給ひて。似つとものもや
君孫とせ給ふ。先帝の四の宮似せせありと。内侍の典侍
といふ女房奏しけしむ。清見の左部卿の宮におかき
入内せ給ひて。藤壺の女侍といふ。あやし給ひて
更衣し似せ給ひて。清見を耐むやうに扱ひし。此女侍を
稚^{わか}とて源氏清見の御孫とて。源氏十二とて清元服
あり。源氏の姓を給ひて。只一人と成あひ中將とあせ
給ふ。清元服の時。清見は。親とて。左大臣を百す。あ
れ。此水の御孫。帝の御妹なり。此清見とて。藤人の御孫と
いふ。男子ひとり。姫君ひとり。御孫とて。源氏の御方
みとの給て。より。清見とて。元服の夜。左大臣の御孫。源氏
わたり。持てあり。是は。姫君とて。藤人の御孫とて。源氏
歳十六とて。源氏の御孫也。源氏の内とて。清見とて。源氏
二條の院とて。内侍とて。相侍とて。おぼし。此卷は源氏
誕生より十四とて。その事とて。あり

はつとて

五月の晴間を記し。内侍の御孫とて。源中將

空輝うつきの娘むすめと云ふたゞ一ひと為なま衣ぎと云て帰かへり給たまひしを何なにと
よみくはらひのさか原はら

空輝うつきの娘むすめと云ふたゞ一ひと為なま衣ぎと云て帰かへり給たまひしを何なにと
よみくはらひのさか原はら

伊勢いせの家の集あつまりある歌うたを書かけてなる新あらたしくよみ出いで
よる似に似にのうと古ふる歌うたをよみ出いでする也

夕ゆふかた

桐壺きりうの帝みかどは帝みかど御みま春はる言こととしておくれとせあひあひとせんとせんと

と一ひと奉たてまつるを帝みかど御みま息いき不なひめ言ことをとりとら給たまひてやめ
あくふ糸いとは短みく更さらけし源げんのうひあふをよみ糸いとは短みく更さらけし源げん
清きよ志しのびありのまのほろむにと巻まふ書かき源げんの清きよめはれと紙し
大おほ貳にの乳ちち母ははといふ此こゝ乳ちち母ははの子こを惟ただ光ひかりといふ源げんの清きよ公きみ志しの
あて公きみ御みま守まもり石いしはふ此こゝ免まれとお言ことく頼たのみて尾お成なりとよみ糸いとは短みく更さらけし源げん
ほろむと小こ源げんといふひよま糸いとは短みく更さらけし源げんの清きよ車くるま入いる門かどをゆるがど
大おほ路ぢ車くるま立たて見みるあつと免まれと家の隣となりは松まつ垣かきなど新あらたし
とくは後あと一ひとあつと免まれと荒あらたにあらと面おもて白しろと云てはあふ
まゝにすゝめとて免まれとあつと免まれとあつと免まれとあつと免まれとあつと免まれと
あつと免まれとあつと免まれとあつと免まれとあつと免まれとあつと免まれとあつと免まれと

何れも中納の後身一人ありてはあはれおひりし
 ねとあはれ人となりしと尋ね給ふと云ふあり給ふ
 ひらき給ふと云ふは侍をばいふ空蟬をさき給ふ
 秋ふたりぬ伊豫の介も夏伊豫より登りぬ空蟬の巻
 人きぐえしてあつひの逢ひし一西の侍方といふ海
 の介は娘小少将といふ屋上人を聲ふさうきふを源
 兼一と云ふ少将うあやうと思ふんかの内を女方たか
 小おがして我さうと云ふせんさう西の侍のくし
 侍のくしあふ

此所叙するは女を新むの藤といふ源引籠りておと
 きと云ふかの事の志し給ふといふと足木あきて空蟬
 よりとも侍をさうひふ親をさうみしておとせの九月つ
 小伊豫の介因へりはあはれいふ空蟬をさき引給う
 文魚の目うねおさく空蟬をさくたるをわきしお
 けふし草に撮扇をさし侍のくし也彼空蟬の巻
 小おがと云ふさうとあさく御も給ひもおけの小神も今
 の事し給ふとて源
 あふもこれ給ふと云ふし侍のくし侍のくし侍のくし
 侍のくし侍のくし侍のくし侍のくし侍のくし侍のくし

みく拭ひ終ひとあり

もみぢりね賀

源の源父相蓋の帝みかどあふたうせあふと朱雀院すざくといふ
あふと十月紅葉のしるふ清賀あふと一とそ皇子みこたち
公卿くぎやう伶人の舞をたひ終く思ふといふ満一
あふ清賀とて寺にほく初はつ日とそあふと樂人あふと
舞をい海とせ清あふといはる也と試樂しぎと内裏とて作
付れあははふ清終しるせと終あふ源氏と紅葉とあふと
青海波せいがはとそあふといはるといはる一とあふとあふと

ちりりめと左大将菊をたてと一と終ふ相あひとあふと頼の
中終あふとびとと花のめとつとれと山木のやとに見え
あふとあふと東舞の清きよ麻衣美まゐと源を宰相しやうの中終あふ
とせ終ふ源末つま終とと清終と終とつとつとあふとあふと
あつたへとととはととあ

あふとあふとあふととつとあふと神子かみこあふと一とあふとあふと
あふとあふとあふと

あふと人の神あふとといはるあふとあふとあふとあふとあふと
あふと人の神あふと揚貴地やうきぢの舞の事あふと年あふとあふと三月あふと
あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

露も志くせ給へるに清年もようせあり一に母孫一とて
 清氣を^{ちきうかい}のぞり是れ一源の清なり不す一とたがひ給へ
 福を清母孫は不の人やあや一と思ふんとくも一のり
 給ひと彩り又此巻ふ源内侍をいひくも清年を十
 七八の氣仕のふあり年母のけ事とすもそのあきいひを
 中將は給ひく人の事とすも此れあり源のけ事とすも一
 源内侍は政の中將は何のともありとすも入すして源公
 にくもあくしわざして是れとせんと思ふ一と婦一人
 屏風のともく怒まきけ一此れも中將のけ事とすも内侍の
 常ふいひのりも此れ修理のたまひあり源のそれの
 思へてそと起て屏風の陰のくまも中將のけ事とすも
 てふふとてあ一古力とぬけの内侍とすも擗ておひつて
 きてていふなるつとてふ中將給へどおねて笑ひたまふ
 源の中將のきぶわりてつくはるぞと志の給ひ屏風のりし
 ろり出で太刀持一と母と入て古力とすも笑ひくぬ
 志あり是より中將もすれどは事^宜はあひて源をせし
 給ひ也相益の帝^{ちう}通とあふ清くくもと春宮^{しゆんぐう}子^{やう}讓^{じやう}里
 たりとせ給へんと思と春宮とありつがの巻一のきと
 何れ一弘徽^{こうき}殿の清くくは^はと子あり春宮^{しゆんぐう}帝^{てい}ふあせ

〇三十一

の孫ふこゝろを源と愛するとしてサ一心をのぞめ孫ふ源女
み誰人ぞ名残り孫へ今づるもにそ^たほひとい思はずともて
孫あつた

う紀事ふやごと清おびらねとも草の原とどこのや思ふ
は方のころの源女をさへ孫くおけおくよりし^ほほ
きつ孫ありし^ほほして名^のばらとたづみ孫り^のまの心あり
源のあつた

いづれぞと^暁源のやごととまけまた小孫あつた^ま風もそ^まま
とまて^暁何つと^暁進ふたれが^まに^ま扇を^まの^まま
別事ある此女君と春まの源母弘徽殿の女侍の源妹

六の君といふを春まの女侍ま^まま^まと^まま^まと^まま^まと^まま^ま
は苑の宴に孫と見^の物の^まま^まと^まま^まと^まま^まと^まま^ま
おとせ^まの^まお^まろ^ま月^まよ^まふ^まと^まま^まと^まま^まと^まま^ま
ひ^まの^ま躬^ま恒^まの^ま歌^まよ^まて^まり^まを^ませ^まび^まら^まり^まを^まと^まて^まぬ^まま^まの^まま^ま
統月おふとく物の^まお^まと^まま^まと^まま^まと^まま^まと^まま^ま
後^まに^ま春^ま宮^まに^まま^まの^ま孫^まひ^ま内^ま侍^まに^ま成^まる^まの^ま統^ま月^まお^まの^ま尚^ま侍^まと^まふ
かくて源の此女^まの^ま行^ま侍^まお^まは^まの^まお^まく^まて^ま惟^ま光^ま良^ま清^まといふ
源家人を内裏に北の陣^まにつけてま^ま弘^ま徽^ま殿^まより^まと^まふ
物^ま車^まは^まの^まい^まづ^まく^まの^ま物^まを^まは^まを^まて^まう^まく^ま見^まる^まの^ま孫^まふ
姉^まの^まれ^まま^まの^まい^まづ^まく^まの^ま孫^まを^まつ^まけ^まく^まみ^ませ^まり^ま弘^ま徽^ま殿^ま

かゝるにふありしけりともねほ位多ひて

能がまをわがまふ礼をうけつと魂とひもびともあよむづのつり

とよみ給ふかゝるにげりひもねほすまをれは源もぬし

此もねほすかゝるにねほすまをれは源もぬし

生れより後壽ひうえたまふとねほすまをれは源もぬし

かゝるにねほすまの源親源氏をよめ源親比限り

あくねほ若君あまは源親の儀式もあまのりくめで

あま源親の侍達も汗押拭ひて今もまるともと

知るすくも源親の平素をまひてまうつる思と

此知るもねほすまのねほすまのねほすまのねほすまの

源目つらふまはねほすまの源親源氏大長也肉裏(まのあま)

源親源氏あまは源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏

源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏

源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏

源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏

源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏

源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏

源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏

源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏

源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏

源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏

源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏

源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏源親源氏

乙女子^{とらめ}が^あい^ふる^もと^思ふ^の林^だの^香と^あつ^るこ^とを^とれ

あつ^たよ^し源^に移^ひて^曉ふ^源ゆ^りと^あふ^源の^九月^十六^日

小^桂川^よて^所後^し移^ひて^申け^時ふ^内重^入る^事の^多く^の

朱^雀別^の揃^ませ^あふ^京に^ある^物も^しと^あふ^おと^れ多^して

み^ど源^に移^りて^揃を^源の^水に^し移^らせ^りて^移ら^せり^て移^れ

よ^りと^伊勢^へ下^りて^移ら^せり^て源^の代^がの^に帰^りて^移ら^せり^て

あ^らむ^の移^りを^ばい^じ也^也揃^まれ^りて^一揃^もし^と移^らせ^りて^あつ^た

移^らせ^りて^源の^代十^四日^の移^らせ^りて^源の^代十^二日^の移^らせ^りて

源^の代^の源^の代^院の^希少^一日^の移^らせ^りて^源の^代十^月の

移^らせ^りて^源の^代十^月の^移ら^せり^て源^の代^とし^て移^らせ^りて

の^源の^代源^の代^院の^希少^一日^の移^らせ^りて^源の^代十^月の

移^らせ^りて^源の^代十^月の^移ら^せり^て源^の代^とし^て移^らせ^りて

の^源の^代源^の代^院の^希少^一日^の移^らせ^りて^源の^代十^月の

移^らせ^りて^源の^代十^月の^移ら^せり^て源^の代^とし^て移^らせ^りて

の^源の^代源^の代^院の^希少^一日^の移^らせ^りて^源の^代十^月の

移^らせ^りて^源の^代十^月の^移ら^せり^て源^の代^とし^て移^らせ^りて

の^源の^代源^の代^院の^希少^一日^の移^らせ^りて^源の^代十^月の

移^らせ^りて^源の^代十^月の^移ら^せり^て源^の代^とし^て移^らせ^りて

の^源の^代源^の代^院の^希少^一日^の移^らせ^りて^源の^代十^月の

移^らせ^りて^源の^代十^月の^移ら^せり^て源^の代^とし^て移^らせ^りて

の^源の^代源^の代^院の^希少^一日^の移^らせ^りて^源の^代十^月の

移^らせ^りて^源の^代十^月の^移ら^せり^て源^の代^とし^て移^らせ^りて

志のび海里あふその世をりく徳をたれが秋の野も見ぬ
 びくく香林院へ宿あり皇母相法がのこるす木の山定
 律師のよその宿あり坊あり才ある法師くく集て論議
 せう路を歩むふ此よの徳徳もくくくく後の世も教く
 けきお世後つくとあゝ海ありくおがくぬまふ紫の
 よの事おのりりてつり皇孫の肉重くありのあを帝
 孫くくおがくして何のと清物つりゆめえのくくせあ小徳
 月東と絶ぬ沙際くくくくくくくくくくくくくくくくく
 げめくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 より皇春宮へありの孫の道あり大所の清身は太納言の
 頼の赤とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 是の燕の古子母が始皇の道あり事とついで源道公はる
 やうにひひをせり源のあや志とお母せとあゝぬ教よりお
 孫くくくくくくの中宮の源の孫孫の絶ぬをわが志くくおが
 志てめくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 ねるすといふすれとい利んをたぐくくくくくくくくく
 とげ尾といふその源のくくくくくくくくくくくくくく
 の肉のめくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 月ねといふくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 とあふくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

原の好色ゆふめくれ物語の抱孫のく書里藤景殿
女所といふの相違の帝女所みく是も源の内藤母と
いふ處一は女所の伊妹三の君とせしむるを源のいふりて
物くゆいあへり是も此巻ふよど急て此人の事の見え
きねどくや性年よりものやう好く意を好くして書里
此三の君く五月持時分源わくよりあひく
ありと水の香をかほくしと郭公花りて置とたづひとせし
やふあひりしと此女君を花散置とふ

はふち歌里

此巻の書出に人とは是れ水公はくしれ物語のしとせし

中よふあひりしと此女君を花散置とふ

真磨

のくわの世と様もまの縁が思ふほどよく引ひ、
 淋しうぬらふてあまきむ種をわがやううよ
 ばふはけえ、何れを彩くうたまの世ありたると思ふ
 紫の上隈は彩くうげを給ふ源も此所別まを堪めし
 く世も源の世身肺の宮、頼の中將此卷ふの二位中將
 ともう世もひふまの縁の對面ありんとて世衣束忌
 おひ整ふて付あまを種もふむひあまふのうげ
 おもやせまの縁の外も入るはれなまらわぞ世と
 の縁の紫の上隈を一目ふうけくくねとせまの源
 身もあててすゝぬも君のうらうらぬ後のうげのふも

と序の巻一しと世のよ

別まもむがまの縁もそのあぶ鏡とても慰めく海
 帥の意中將、対面ありて海り給ふらうひの源花散里へ
 晴乞ふおくして明方にいり給ふ今日の荷物めつけさせ
 文集入る箱琴のうらぐりも持せ給ふ知行の證文もの
 紫の上隈は彩く今宵の所父院の所、陵へ歩晴乞ふ給ふ
 のまひかき給ふ後、はなも何れぬはふもくねとありあむ
 春宮の序うしろとふ故院のあひもあせまのうらうら給ふ

町よりおろして明石小引籠里也唯却より上は娘とやら
 けり無合しと方より人々夥多と云ふと有りかど忠事公
 あるとて合点せぬ源の眞磨おとと海とを笑さくゆを
 源へまゝんと女房ふりの磨の由りぐましく持ひしを人
 みよとの赤目と云ふ人ぬすむ被れゆふ危途一終ふ人の此
 田舎ふまじ山嶽をゆを流るふ入ありん。の流うを流るを
 聲ふまゝん毛いせく一記事とつくど入道殿ありて源の
 母相益のまゝい入道々伯父按察大納言の娘也云々
 身とて新しきはふ出ーけ建が國王の赤籠をゆりし終り
 罪ふありて流るる人々唐出ふも我初ふもきまゝ一まゝし

何事にもぬれぬと云ふ事也只女の云々くもて新
 ちめが事と云く也神の赤籠と云ふ事とて氣小二度ゆ
 後者一流せせけり事と云ふりぬ眞磨ふ去年極多ゆ
 若木の橋下の小喧一と云うが免てよを此此をながし
 出陣茶の上の赤兄頭の中將今の宰相也世のとうめゆりて
 同ト罪小ゆも毛是非と云ふとて赤と云ふは眞磨(おの
 りあると云ふと云ふ事と云くはれ)と云ふは先づ赤と云ふは
 家の作り色と云ふゆりの恒志と云ふと云ふ石若松の柱
 ねらそゆ面白ー一赤郎と云ふ何と云ふて見ても持てまゝと
 赤赤(右)と云ふ浦子事ゆりゆまゝも赤赤ゆりゆまゝと云ふ

浦風やいふうらむ只ひや神女好く波るあは
 津波さくさりのしをねがして遠くを去て京の事
 同く京も此面風をさるふあはびとを津波さくさる
 おど中はまびくさ海に津波のく後者の神とよめ
 うらばの神ふ預をさめてあふいやく雷鳴り車轉て
 源の西元の同小續く楼おねりさるえつぐりさく楼を
 やけぬ上下もいさびありあまを何とれさるぐさるあふ
 悪智をさるんやうにさく日も善ねがう海ごらこあふさふ
 所父救院源の西傍ふさくせあひさく船どく怪し記不
 ともて信吉の神は守りさるさくもや舟出して此浦をさる

我も信ふはりし時あやまの事いさするもかどさうおし
 ありそはは罪に於てはゆあ此序ふ内裏をさる
 善と事いさすばさくともあひさく善の是ぬを曉よ明石の
 入道よりこそ人まきりいさおねをいさはりりさる善の
 若ふ但せ津波いさなる此う源へ披露し後こそ小舟ふ
 人二三入京せおとせり所父帝を此浦をさるれと告あひよ
 かく善の若とて近ひ小舟まきりいささる此舟ふさるて
 明石へさるりあ入道源をいささるて先を忘るし
 延る如地して笑も業へ先信吉の神をねさる公の限り
 とそりいさく序もや娘の事いさおんと持てさるいさ



